

『当たり前』の日常

福岡市立元岡中学校

久保 結愛

小学校卒業を間近に控えた三月。父の転勤により、突然他県への転校が決まった。二年間という短い期間ではあったが、この出来事は私が税金について考えるきっかけとなったように思う。

中学三年生の今年、元居た地域に帰って来たのだが、私の住んでいるこの地域は、九州大学の校舎移転に伴い、約十年前から市の都市開発計画で再開発が進んでいる場所だ。新しい家が建ち並び、道路は綺麗に舗装され、通学路も安全だ。新設されたばかりのピカピカの小学校に通い、放課後に遊ぶ公園もたくさんあった。体調を崩せばすぐに病院に通うことができ、一病院につき、一ヶ月で五百円と、お小遣いで病院に行けてしまう程、医療費助成も充実していた。

一方で、転校先の地域では、小学生が歩く通学路でさえ、白線が引かれているのみで、真横すれすれのところを車が通り過ぎていく。学校の校舎は今にも肝試しが始まりそうな程ボロボロなのが常で、私の通った中学校は築七十年、改装されたのは四十年も前だそうで、教室のエアコンは五年前に設置されたばかりと、あまりの環境の違いに衝撃を受けた。当たり前にあった公園も少なく、整備されている公園は更に少ない。医療費助成も進んでいる地域ではあったが、受診する度に五百円と、福岡がどれだけ恵まれていたのかを思い知った。

県や市が異なるだけで自分を取り巻く環境がこんなにも変わることになるなんて……。転校前までは当たり前だった日常。それらの環境整備には多くの市税が使われていたのだ。

福岡市の歳出予算の内、自身に関わっている子どもに用いる税金（子ども育成費・教育費）は全体の三割近くにも上り、よく利用する公共施設の建設費用等、間接的なものを含めると更に多くの税金が投入されている。しかし、転校先の市では、人口減少が進んでおり、特にその大きな要因の一つが、大学進学や就職での若者の県外流出である。そのため、高齢者の医療費負担が市の財政を強く圧迫しており、子どもの学校や都市開発に充てられる税金が少ない現状だったのだ。地域によって税金の予算や使途の配分が異なり、同じ中学生でも環境が大きく変わる。

このことに気づくまでは、知っているのは消費税ぐらいで、税金を意識して生活することもなければ、ニュース等で見聞きするのは負のイメージが膨らむことばかり。正直、税金に良いイメージは持てていなかった。しかし、私の当たりの日常は、みんなが納めてくれた税金によって支えられ、調べをさらに進めると、困った人を救済する制度等も多く整備されていることも分かった。

難しそうと嫌厭するのではなく、正しく税金を知る努力を続けていきたい。そして支えてもらうばかりでなく、私も誰かの大切な「当たり前」の日常を納税を通じて支えていきたいと思う。